社学同通達 N05 S42.3.9

1 合宿の位置付けとその内容
2 関西ヌンド総括
3 明大斗争の総括
4 后期斗争の総括
5 方針
6 百周年委員会通訳について
7 ドイツ革命の総括

社会主義学生同盟同志社支部常任委員会

〈合宿の位置付け、と内容〉

A ①今春休み期間中の一連の研究会、合宿等々は一般的に左翼的知識を豊富にするためのものではなく、政治的実践の方法的内容を確立することであり、より具体的に云うなら戦后過程の新たな段階と、我が同盟とヌンドの誕生以来の外的・内的課題を追い、更に同大后期斗争、12月～2月の組織問題、明大斗争を、現在の方法論的致達段階で総括し、我同盟の政治的立却点・思想的党派性・中央集権党組織の確立・形成を通して、70年効乱＝非合法活動の革命的展望と同志社の課題＝授業料「決戦」の内容的・実践的保障を造り出さねばならない。これが春休みに課せられた我々の任務である。

B ②权力の対極にプロレタリア党があるとすれば、情勢の科学的分析を权力との対抗関係において、又革命的創出において、唯一このことを語ることができるのであるが、その权力体制は帝国主ギであり、現在的特徴は、 1. 両階級の非和解性の明確化とプロレタリア階級内部の分断攻作であり、
2. 専制＝侵略と抑圧、独裁、暴力である。
更に 3. 「体制」そのものであり、国家・民族という表現をとる。

③故に、それとの対決は、权力の対極に綱領を保持した党組織が存在し、その独自合法活動と合法斗争組織に対する個別改良斗争、全人民的政治斗争を通して統一戦線を形成し、そのプロレタリアの人々モニーによる「权力」の掌握へと進まなければならない。

C ④そこで現実過程の問題を解明する方法として、現在の致達段階＝「戦略・戦術・人々モニー・党」の環を設定する。

⑤戦略 「反帝斗争をプロレタリア日本革命へ」のスローガンに収約される日本革命の方法であり、終極目標たる世界革命へのプログラムである。我々の戦略的立場を明確にするためには日本革命と世界革命の相互関連、プロレタリア階級内の力関係の上に、その革命への方向性を与えるもの、これである（日共の戦略参照）

戦術 戦略（革命）の確立の下に、それへ致達する諸段階での"手段"が戦術である。現在焦眉の戦術として「全人民的統一戦線」であり、又斗争戦術のリアリズムが問われている。

〈戦略と戦術の相互関連性〉〈戦略と戦術は綱領（戦略綱領、戦術綱領）として革命の"用具"たる党の内容をなす〉

人々モニー 党の綱領の介在による革命への組織路線、イニシアチヌのことであり、いはば政治的実践的人々モニーと知的、道徳的人々モニー（を云う。党の人々モニー）即ち改良から革命への目的意識性を大衆組織へと環元し、革命＝プロレタリア权力へと導かねばならぬ。

党＝革命党とは全ゆる改良的、合法的諸斗争の先頭に立ちつつも、その限界性を将にその斗争の中で全ゆる被支配階級に認証させ、その部分を真に革命へと形成する共産主ギ者の任務を遂行する組織であり単なる「活動家集団」ではなく目的意識性（革命への）を持ち、大衆組織から独自の党組織を形成し、革命への綱領を持つ自立した中央集権組織である。

⑥党を中軸とする戦略、戦術、人々モニーの空間的有機性と時間的連続性を現実の党＝ヌンド、社学同にあてはめて実践的に追求せねばならぬ。概念規定とその関連を云々することはにまわせておけばよい。

⑦この図式の中で、党を中心に有機化しなければならぬ問題は

- 自然発生性と目的意識性
- 合法と非合法
- 改良と革命
- 陣地戦と機動戦

○全人民的統一戦線とプロレタリア統一戦線
○最大限綱領と最小限綱領、
○右翼日和見と極左日和見
サンディカリズムと社民　　等々の問題である。

D

⑧さて情勢の急激な構造的転換＝帝国主義的専制＝金融力頭制国家の移行に比して、我同盟を含む全ての左翼諸潮流はばなはだしい立遅れをみせている。革命党として破産を宣告された社会党はもちろん日共は革命的な影響力を失しつつあるとはいえ、我々の対応もそれを乗り越えるプロレタリア本隊への影響力は勘だ微弱である。その克服を明示したものこそ戦略、戦術、ヘゲモニー、党という環の設定であり、その有機性、連続性を把握しまず具体的な総括過程に入り、その総括の上方針が出されなければならないことになる。

⑨ i 政治過程論 ― ヌンド統一の総括
ii 后期斗争 ― 12月 ― 2月の総括
iii 明大斗争総括　　を「戦略、戦術、党、ヘゲモニー」で見ていくわけであるが、

[I] この意味はこの方法論が現在の下達段階であり、安保斗争を斗いぬきその后日本革命を模索している我同盟の当時の下達段階＝歴史的、外的制約性と内在的必然性の課題を見ていくことによって、情勢との関連の中で現在の方法論とその具体的革命Mの実態を検討でき、方針が明示される。これがいわゆる総括である。

[II] つまり同大学友会と同大社学同が昨年展開した后期ベトナム反戦斗争の全過程に安保斗争から全学連再建（政治過程論―ヌンド統一）を対照化せしめ、又12月から2月段階で問題となった組織＝党組織的問題に明大斗争に見られた偏向を透視して教訓を出すことが重大である。なぜなら出さなければならないのは他ならぬ"同志社社学同と学友会自身の方針だからである。

[III] (a) 明大斗争の局地的内乱の中で明らかになった二つの傾向＝①組合主義的取り引き、帝国主義への克服、改良主義、②極左日和見主義（このことは我々は不充分ながら同盟通信No1で昨年9月明らかに予見していた　大衆追隨と極左冒険主義の二傾向に他ならない。）を我同盟の党組織のあり方としてこの方法で克服する道を明らかにし、

(b) 小戦術、大戦術―改良と革命―（民主々義斗争の評価＝政治過程論）の関連を戦術と戦略として現在的に明らかにしなければならない。（相対的安定期から「革命か反革命か」の前段階）

(c) 活動家集団ではなく明確な綱領を保持し、大衆政治組織から自立した党組織を形成する課題として、即ち合法組織のMから非合法活動を同時に準備する目的意識的革命党形成の要請に答えて従来の社学同の体質を改善すべく、权力との対局にトータルな方法論を保持した革命党を建設しなければならない。……このトータル性を明らかにする。

⑩以上「党、ヘゲモニー、戦略、戦術」の観点で、現時点で下達段階を現実同志社の情況を見、総括の上に立って方針を明らかにしなければならない。

E

⑪基本的方針

[情勢の特徴] は国際危機と国内危機（民族国家間対立と金融力頭制国家）の連続性である。
[階級斗争の特徴] は〈金融力頭制权力、国家与諸階級〉の非和解性、個別合法改良斗争の激化である。
それ故 [A] ①個別改良斗争（組合）に於る戦術形態の政治的リアリズム
②総括的改良斗争（全学連）に於る全体性、国際性、
③、①②を結合するものが党を媒介とする全人民的政治斗争（全人民的統一戦術）が要請される。

[B] ①②③に於る党の機能は

①組合＝自治会な戦術を通して個別資本＝当局及ら国家との対決は必然的に資本に吸引されている反革命部分＝右翼との暴力によるそれとの対決の排点での〔党〕の役割は㋑全く非合法であること，㋺反革命を革命权力による粉砕＝ゲバルトの勝利，㋩このリアリズムで非合法意識を獲得した大衆との結合，㋥大衆性による改良の果実，㋭対国家階級斗争との結合，これである。
（同大授業料斗争）

②全人民的統一戦線による合法的改良斗争に於ては暴力形態より分断を配（分解及ら再編への攻作）する故，㋑金融力頭制国家の専政制をバケロし，㋺それ故，統一戦線による利益防衛斗争以外にないこと，㋩その過程で戦術を媒介にしたプロレタリアートの权力獲得の必然性を明らかにする。㋥それを通してその現実への政策＝綱領を示し，㋭プロレタリア革命党の下に組織をおく，これである

No3

〈以上〉

政治過程論―第三期論―プレファシズム論の総括

■ 政治過程論―革命的政治斗争

〈現在的位置〉 党活動として展開されなければならない。政治力学の軸として，戦術の連結的展開による永続革命論的設定は出来ない。現在的政治戦術の内容と位置とその過程での党組織の形成と独自活動の包括した組織論（プロレタリア独裁に至るまでの意識的，主体的介入の過程を含めた理論）の中に政治過程論を位置付ける必要がある。現在の民主々又的改良斗争を革命的戦略プログラムの為の過渡的戦術として設定しなければならない。Mの民主々ギ斗争―反权力斗争―反帝斗争への質的転化，即ち連続的止場の問題，大衆の意識化（プロレタリアートの階級本能から階級形成）に対して統一戦線の基本的戦術形成を採用しなければならない。民主々ギ斗争として区別される斗いとして組織しなければならない。即ち学生を社学同の下に組織しなければならない。改良斗争と別個の形で革命を組織し、民主々ギ斗争，小ヌル斗争に対しては階級的な宣伝，煽動として，社会排外主ギとの斗争として意識的に展開されなければならない。社会排外主ギと意識的に区別された部隊（反帝派）の獲得、組織をしなければならない。この様な意味で政治過程論の有効性と限界性を確認する必要がある。

〈61年の政治，経済情勢〉 安保の五、一九以降，分散化した国民の意識が再び自民党の下に再結集されつつあり（高度経済成長―経済ナショナリズム）という政策をもった池田内閣の登場，安保以降日本の左翼，諸力は組織をめぐる問題に焦点がしぼられていた。その様な中で国家に対して幻想的政策を対置する和賃改革が主要な政治汐流として登上しつつあり，革共同，反綱領主ギ（谷川雅），ナンテリダンチャ自立Mの勧め（吉本隆明）のはびこる中で，国家の幻想の心ケ口と組織論を戦術的に大戦術，小戦術を权力奪取の次元に引き上げるダイナミズムにしぼって追求しようとしたものである。

■第三期論―プレファシズム論―ヌンド統一の過程〉 大管法斗争は，第2期と第3期の結節点をなし，大管法斗争以降，政治力程論的にMの発展方向を設定できず，Mの低滞と后退をもたらし，かゝる時期に提出された社学同の自立M論は拠点確保といった観が強く，状況への積極的意味をもたない方針。

64年に提出された第三期学生M論は，60年后半の日本資本主ギの推移，階級関係と階級斗争の基本的性格を予見し，そういった状勢に対応したM論・組織論の提起

〈現在的位置〉 第三期論は，全体的には現状分析を中心に展開され，M論・組織論に関しては，一般的な提起に止っている。

〈岩田弘〉

50年代の学生Mの先駆性論，労学提携の新たな役員を語りつつも，その現実的具体的内容は提起されていない（現代革命に於る改良と革命，その媒介の問題に我が同盟の思想斗争の焦点）がある。現在，第三期論を中心に再度位置付け直す必要があるだろう。第三期学生Mの主要な内容―現状分析は現在でも基本的正しさを持っているが，日韓―早大―明大斗争の過程で第三期論より豊富化した理論内容として提起した。

〈内容〉 ほぼ，三点にわたって論理展開がされている，第一点は国際的危機の等質性と同時性の問題であり市民社会の再編の時期の到来と諸階級，諸階層の分解と再編が開始されたという事

「現段階に於る階級斗争はこれら后進諸国と国際独占体のなし崩的政策のもたらす矛盾の集中的爆発点，各国内部に於ける，后進国部分を顕在化させている」 しかも「現段階に於る，階級斗争の中軸を見通す視点は，以上の如き弱い環にのみあるのではない，それは恰も自由主義段階への資本主義の突入のもたらした新級斗争の昂揚にこそある」

岩田弘 倉政

〈内容と意義〉

安保斗争の延長上に設定された，客観的政治構造の発展法則と戦略と戦術の位置を明らかにしたものである。第1点は政治斗争のダイナミズムの内容である。反対Mの全国的相互化した全国政治斗争の展開（戦后民主

〈鉄鎖を砕け〉

主義体制，高度重濱成長という物質的基礎）— 日家权力そのものの暴力と直接対決する段階は設定しうるその運動的発展過程的変化としてもたらす決定的な要因として戦術を位置づけた「全日政治斗争は小ブル的性格を色うスクも，日家权力を通じてあらわれる日家の本質への斗いが戦術によって，日家权力の直接対決にまで高められる」．「安保斗争に於ける全学連の小は民主主義擁護斗争という改良斗争を民主主義の徹底化の斗争として発展させる中で戦術によってその斗争を革命的高揚に転化しうるという事を証明した」—政治過程論—

オニ矣は戦略と戦術の相互連関性の提起、戦術と戦略の一連の過程であり，戦略と戦略の分析は許されない。その内容を大戦術，小戦術として明らかにした。「但々の改良での小戦術は最も深い政治斗争，即ち，革命的情せに於ける、大戦略を準備するものとして位置づけられる。我々は改良の成果そのものを目的とするのではなく，改良斗争を戦略によって，より政治的に，つまり対权力の直接的対決に向かって発展させ，その過程での革命の条件を準備し，全体として大戦術へと発展せんがためである。」「誤った戦術によって、引き起こされた政治過程は決して戻しえず，戦略そのものがくずれざるを得ない，さらにこの理論は戦略の固定視であり），戦略に於る誤りの合理化である。 —同上—

オニ矣に革命の内面构造の问题として组转を提起したが组转论に関しては原則的、一般的提起にとどまった。

① 党とは：過程の意転であり、不断に党たる事を証明するものである。この為自らを発体的に意転しなければならず"、圣済决定论とは異る。

② 党は，大衆の諸要求が革命過程の総体と有机的に結びついた意转的な活動を行うこと。

③ 党の運営に関しては、日民的、社会的等質性に基ずいた所の同意が必要であり，古い共同体、地方组转反動的结社等を破ぬいし，新しい価値体系をつくりだすようめざすこと。 —革命的政治斗争とは何か—

④ 「この様な基本的諸矛盾と他方での第三環の矛盾とが结合する時，日家独占资本主义のなし崩し自政策は重大な困难に陷入るだろう、ある矛盾へと引火する所组斗争が爆发するという事はそれが日际通货体制に直结する时、全き界に波及する矛盾の顕在化という展望とするものである —オ3期論—

4、17を軸とする所组的流動の、プロレタリアート内部に於ける流動をオ3期として肯定的に評価した。

次のPageへ！

オ二矣は社会政治斗争と政治斗争の相互連関の内容として提起している。「57～58年頃から始まり62頃から全面化した大学の資本の直接支配と合理化—职场支配ともいうべき，大学の支配体制の変化より起こったものであり，云は政治的攻撃と圣済的攻撃が一体化して展開されそれの学生の政治的、圣済的対応も一体化するが故に，そこでの対状は明確な資本の存在を意転させていくのである」，即ち社会政治斗争の実体を明らかにした、しかも社会政治斗争は「労价者所组の企業意转と等質性を持つが故に、意转が存在し，その意转をのりこえることにたってこそ，始めてこれらの社会政治斗争は実質的な勝利をかち取ることが出来る」つまり反帝斗争としての政治斗争へと高めるところに新たな革命的政治斗争の方向を示したのである。 そして社会政治斗争と政治斗争の関係と反帝斗争の実体に関して次の様に结んでいる、「故にただ今后の大衆の中心の政治的ヘゲモンの確立は社会政治斗争を抜きにしても政治斗争を抜きにしても語りえず、両者の独自的な徹底的展開と両者に存在する両者の独自的一斗を抜きにしては、形成されないのである」 —オ3期論—

オ3矣は党形成を含めた组转论、小論を提起したが、ある时期に於けるプロレタリアートの成熟（所组形成）一指针の组合主义的政治から资产主义的政治一が要请される。 そして自然発生性の目的意转的指导性の问题と前位党の建设とその组转化を予見し(さらに) 自然発生性の指导理念をプロレタリアヘゲモニーとして统一强化することを最大の课题として提起した。 オ3期論の革命的课题をもって具体化された斗争は④大衆Mとしては展开Mであり⑬同盟のフラク活动としては64年より2度会によるフラク统一战线の确立によるプロレタリアヘゲモニーの確立であった。 しかし④に関してはオ3期論が要请していた大衆组转の分离と结合「改良と革命」の連関性により具体的革命组织として確立していたことが未成熟であったが故に実体的Mは50年代的方向を示自自治会主义的政治主义としてとり、現実Mは展开されなかった。

ノ Ⓑに関しては離合、離散していった、労研、社研をリーディング形態へと移行への移行として党建設の過程の中に位置づけフラク統一戦線から左翼統一戦線へと転化し転化ノ即ち、日韓斗争過程で反戦青年委という組織体と定式化していった。

3 3期論以後の「」の意味したもの

戦略、戦術、ヘゲモニー、党の永続的発展の下向過程の最終の段階として捉え新たな上向過程、即、全体的性及ら党、ヘゲモニー、戦術、戦略としての党機能の実体化を70年阻止決戦に向けこの革命の具体的展開とヌンと前衛党への阶级意識の具体化を具体的徹底抵抗部隊(反帝部隊)の形成を意味した

大衆的には6.5年の公労協労働者、中小企業労働者の生活斗争の激化と政治斗争としての日韓斗争として方向に抵抗戦線部隊から反帝打撃を政治カテイに形成するなに組織された。

社民の裏切りと議会主義的政良主義への傾斜、ブルジョア右派ニューライト派の補完提携へと埋没し他方労働戦線もきた、宝樹一堀井ラインの西欧型組合主義(村改)への移行と、太田一岩井ラインの日本型組合主義の資本の攻勢の下での御頭主義的議会取り引き主義の台頭をもたらした。

① 安保斗争の如く ブルジョア阶级の流動性の分散と、それに反して〈諸阶级、諸阶层の流動化は分断的、相互対立的利害関係を顕在化させた〉学生にも同様の分散傾向をもたらした。

Ⓑのフラク活動としては「政良と革命」「政治組織と大衆組織」の「党機能」と「組織」の両面の組織的機能論として向われたが「社会政治斗争」と「政治斗争」を反帝斗争として結合させ、「方としての革命意識(反帝打撃部隊)」に高めることなく逆に政良斗争としての戦術的徹底抵抗や反帝的街頭ラジカル主義などという技術主義の傾向に埋没し、終局的には二者択一的指導として客観的には終始するに至った。

この教訓を顕着に克服できず前カ下したのが早大斗争であった。まさしく、ねく突破口を切り開くべきものが「党」と「大衆組織」の分離と結合としての「党」機能、フラク活動、グループ活動、大衆組織の両機能化を確立すべく、党建設の要請と一連の機能化であった。こうに66年ブント戦と統一ブントの統一によるブント全国委の形成であった。そしてここうに明らかにされて来た政良斗争としての生活斗争と「市民的な政治斗争」を更に克服すべき「革命的政良斗争」からも「反帝政治斗争」へと発展直進することなくしては、何らの「政良の果実」も獲得できない。ここに新たに「市民的ヘゲモニー」を永続的る日和見的革命に克服すべき プチブルの「陣地戦一知的道徳的ヘゲモニー(民主ケ斗争の特殊な役割)」と「代行戦一反帝多数派の形成(反帝打撃部隊の形成)」なベトナム斗争をその試練石として向われてきたのであった。」

NO1

明大斗争の教訓

明大斗争は我々に多大の教訓を与えた。帝国主义的ヌルジョワ秩序の全面的再編の時期、革命及反革命及の時期に於ける日本階級斗争の相造と性格に見合った現在的学生Mの質が問われた斗い。その主要環は、階級形成の視点からの労学提ケイ全人民的統一戦線であり、随地ヘゲモニーの視点からの社学同全国セイハの方向とその天王山的斗争の革命的指導と全学連主流派としての地歩の拡大であった。しかし帝国主义段階に於ける個々の斗争は徹底的とならざるをえない。ラジカルな斗いは大衆を教育すると同時に指ド部を試練の炎にさらす。明大斗争に於て指ド部は現代階級斗争の一般的性格と相造を縮少した形で体現した。权力との全面的対決と政治斗争への転化の萌芽をはらんだ極限状況に於ける改良主义的日和見主义と玉砕的極左日和見主义の出現である。明確な战略战術の位置付けの欠除に伴う、斗争の非科学的把握に伴う党的活动、党的指ドの方向の不明確さ、斗争自体の質をめぐる指ド部の分解と大衆への包括性の喪失と急速な新幻想と凝似進歩性と物理的暴力をテコとする反革命的秩序序の固定化。そして斗争は全体的に后退し、大衆の斗うエネルギーは冷却したかのごとくである。明大斗争が六十年代后半の偉大な斗争の舞台ゲイゴになったかどうかは今の段階では解らない。唯一残された道は党組織の全面的大衆との接点の回復とそのヘゲモニーの貫徹であろう。京都府学連主流派を認じる我々は早急にこの斗いの教訓を体系化しようではないか。

明大斗争

(1) 運动の発展過程 (完結的斗争としての過程論的考察)

明大斗争の発展過程にとって、大衆運动の発展の内在性とそのエネルギーの質、その大衆意識の段階に見合った、斗争战術斗争形態、その時の状況の全体性を表現する集約、その時期に於ける政治リアリズムに立脚した党活动の内容と形態をヘゲモニー、党(自己权力確と党独裁)の観点から追ってみよう。

① 決战を射程にした前段階に於ける战略的運动

㋑一般的大学論の提起から歴史個人科学人間の関連を踏まえた知的包括性を覚醒する段階

㋺クラス討論、自主村座、研究会、パンフ等による全体的知的ヘゲモニー確立、更に個別斗争推進とそのエネルギーのタメ込み

明大斗争

㋩学園民主化斗争と個別斗争支持、学生主体の学園論

㋥大衆研究会等々を通じての党の大衆との接点の拡大

すなわち、授業料(決战)勝利的に突破する為の意識の木い込こと知的ヘゲによる集約性の静的確立の時期、エネルギーの各部隊の調整と战線の整備、組織化の段階、啓蒙的運动の段階。

② 授業料値上げ表発を契材にする斗争の自然発生的、民主々义的、改良主义的、合法主义的発展過程。

㋑小市民的民主々义意識、幻想的、防衛的大学、学問防衛意識とインテリ的反体制意識の結合。

㋺大学論の提起から当局の全面バクロに乗っかったパンフを中心とするクラス討論、団交の積み重ねによる啓蒙

㋩「授業料値上げ白紙撤回、至営内容公表」が集約の環となる。

㋥斗争委等の大衆合法斗争組織に対する党的介入による先進的非合法斗争部隊の形成がなさるべき時期。

③ 合法斗争エネルギーの全面開花と斗争の固定情況、二重权力情況。

㋑②の段階の質と形態をもっては大衆意識が内的にも外的にもそれ以上の発展を停止する。より新たな大きなイメージのみによっては大衆意識をつかめず、かと云って具体的解決策を対置できず、合法的意識から非合法意識への流动の契材不在

㋺先進的战術の積み重ねとアジ、団交によっては流动望めず、なおかつ大衆の意識の一定の高場と固定化により急速にバリケード村築さる。静態的、受动的、防衛的線として設定される。長期的宣伝、セン动の必要性と知的ヘゲモニーの観点からの自主管理としう恒常的战術形態の定着化が必要となる。

㋩大学行政の全面批判と既成大学論に対する新たなプロレタリア的大学コンミューン論の展開により、階級斗争の「工場占拠、生産管理」と同等の「自主管理、自主訂座」が战術形態となると同時に体制批判と矛盾、疎外理想論が集約の環となる。大衆斗争組織の集約は「全ての权力をソヴェトへ」になる。しかしこの時期

NO2

の斗争の質は静態的、受動的なものであり、ダイナミズムの行きづまり故に現実的大衆意識の正当性がバクロされ、その現実性故に大衆は離散するが、それは根性的エネルギーそのものを否定するものとはならない。

㊂②の㊂を踏まえた全面的大衆化を図り、宣伝、セン動を環とした党的組織化の時期。「自法から非自法へ」「改良から革命へ」の契機を充足さすべき思想内容を環とした斗争の質の蓄つめを急ぐべき時期、「大衆の中へ」が政治組織のスローガンとなるべき。

※ ロシア革命に於けるレーニンの偉大さは運動のダイナミズムそれ自体の中に現実的党組織の在り方をとらえた点にある。一九十七年二月～七月のソヴェト形成と二重権力状況の中で（大衆的暴力によってソヴェトが防位されている時期）彼はその状況の突破の方向をどのように設定したか。二つの権力が並列的に存在することの原因として次の点を上げている。「原因はプロレタリアと農民の自覚と組織性が不十分なことにある。」そして「権力となるためには自覚した労働者は多数者を味方に獲得せねばならない（大衆に対する暴力が存在しない間はこれ以外に権力に到達する道）ない。」としている。「プロレタリア的共産党をつくりだそう。」「プロレタリア的、階級的活動のために結集しよう。」見事な定式化である。運動と組織の弁証法的結合。レーニンの党組織論を形而上学的に考察してはいけない。以上のごとき運動のダイナミズムと状況の中でこそその力を発揮する党―それがボルシェヴィキ党であるのだ。更に二重権力状況に於ける彼の論理を全体的に追求しよう。「自覚した労働者は、労働者、雇農、農民、兵士代表ソヴェトの単独の権力に一冒険によってではなく、プロレタリア的意識を明確にし、それをブルジョアジーの影響から解放することによって準備された単独の権力に賛成である。」「問題は結局、労働者、雇農、兵士代表ソヴェトの内部で影響力を獲得するための斗争に着帰する。」「忍耐づよい、根気よい『大衆の実践的必要』に適応した『説明』活動が必要である。」以上が一九十七年二月～七月の間のレーニン党の方針である。「二重権力は革命の発展途上に於ける過渡的な時機、すなわち革命が普通のブルジョア民主々又革命をこえて進んだが、しかしまだ「純粋の」プロレタリアートと農民の独裁にまでは行きついていない時期をあらわすにすぎない。」という基本的認識（力関係の判断）に立ち、二月～七月迄の事情を「武器が人民の手にあり、外部から人民にくわえられる強制がなかったこと…」というように説明し「全権力をソヴェトにうつせ」という革命の平和的発展のスローガンを打ち出し、党には「大衆の中へ」というスローガンを要求するのである。しかしそれは運動のダイナミズムの機関が不在という状況に於ける党的政治リアリズムであって、激動の中に於ける権力確立を射程している故にリアリズムを持ちえるのである。「一つの国家に二つの権力は存在しえない。そのうちの一つは消滅しなければならない。」この認識の上に立つ戦術こそリアリズムをもつのである。彼はその契機をどこにもとめたか。七月の反乱である。「権力は決定的な個所で反革命の手にうつった。」「七月四日以后は反革命的ブルジョアジーは～軍事的従党の手に事実上の国家権力をひきわたした。」以上の情勢の変化から戦術スローガンは「この権力をたおせ」になる。更に二つで始めて一党独裁（ソヴェト―ヘゲモニー―党の観点からの）の思想が出現するのである。最后を次の言葉で結ぼう。「それぞれのスローガンは、特定の政治情勢の特質の総和から引き出されなければならない。」

一九十七年二月～十月の過程に於けるレーニンの引用が長くなりすぎたようである。しかし明大斗争の問題の核心が極限状況に於ける党と大衆斗争組織との関係にあったとすれば、ロシア十月革命とボルシェヴィキの考察なさけて通ることはできない。更に二月～六月～十月の政治情勢の分析と戦術スローガンと大衆意識の拡張に関しては「スローガンについて」「革命の教訓」「我が国の革命に於けるプロレタリアートの任務」「戦術について」等々を参照されたい。

(4) 全体的目指的ヘゲモニーの維持による平和的、限界的自己权力の内実形成の時期から、激动への移行の時代

权力の暴力による契機の創出によるダイナミックな飛躍の時期。二重权力状況の突破。ヘゲモニー权力一党の全体制確立の段階に於ける全体的、立体的党的指導が問われる時期。党によるプロレタリア的秩序意識形成の時期。

① 暴力という外的ショックによって大衆意識は流动を開始する。改良的民主的防衛的斗争の極限的固定状況を革命的プロレタリア的攻撃的斗争に転化すべき契機の現出である。すなわちダイナミズムの中での大衆の現実的正当性が破壊されるのである。

② 大衆の自然発生的運动の内在的意識の極限的戦術形態としての、静態的、受动的、防衛斗争形態としてのバリケードをはさんでの知的確認的ヘゲモニーを中心とする二重权力状況から全面的機动戦の展開による自己权力的ヘゲモニーを確立する時期。斗争形態はバリケードをはさんでの左右の暴力の対決となる。その段階に於いてバリケードの戦術的意味は大衆の自然発生的防衛的線としての性格から、状況の要請と方向性からして自己权力確立という目的意識的攻撃的線となりうる。先進部隊の各戦線に於ける权力としてのヘゲモニーの最終的整備が為される時期であり、その運动形態は大衆の全面的機动戦への投入としてなされねばならず、各個ヘゲモニーのその機动戦による統一的全体的ヘゲモニーの統合でなければならないと同時にその性格は革命的新秩序として体現されねばならない。党の革命权力としての体制の集約の時期であり、その斗争戦術は革命的暴力である。

※ 運动の局面的極限的状況に於ける我々の暴力＝蜂起。レーニンは「蜂起を技術として取り扱わなければならない、まず最初の成功をかちとり敵に対する攻勢を中断せずに、敵が復興しているのに乗じて次から次へと成功をおさめて進まなければならない。」とし蜂起が成功をおさめるための条件を次の様に定式化した（一般的なものではなくロシアの十月に於いて） ①それは陰謀や政党に依拠するのではなく先進的階級に依拠しなければならない。 ②それは人民の革命的高揚に依拠しなければならない。 ③人民の前衛の隊伍の活动性がもっとも大きくない、敵の隊列と弱く中途半端で不決断な革命の味方の隊列のうちで动揺が最っとも強まるような転換的に依拠しなければならない。 ①は明大斗争（学園斗争）の場合にはそのまゝではあてはまらないが（転換点は右の暴力である）

③ 「国家权力－大学当局－官憲－右翼体育会＝反革命权力を粉砕せよ」が斗争戦術スローガンとなる。二重权力という静態的平和的発展の終エンである。この時に革命的暴力を否定するものは犯罪的である。何故なら運动自体の内在的発展性が暴力抜きには語れないからである。

明大斗争に於いても、この次点で前衛部隊に分裂が生ずる。しかし、ストレートの形では大衆の斗争意識と斗争戦術形態が一致しないのである。すなわち、二重权力状況を許していたものが大衆の民主々々的改良的合法的＝ネブル的意識の発展の限界としての、全体的意識形態の静態化であったとすれば、それを思想次元、すなわち大衆の意識が形成される現実過程に於ける意識の変革がなければ（知的、道徳的ヘゲモニーとプロレタリア的意識の注入）外的暴力のみによっては、大衆の意識はそれ程相異を見せないのである。しかしこれを固定的に把握してはならない。意識の内在的発展、変革には限界があるのであり、③の段階の大衆意識の固定化が彼らの意識の正当性を打破する現実過程に於けるダイナミズムの中でのバクロを行いえなかったことにあったと考えれば、更にこの段階になって右の暴力という物理的力が斗争の全体的意識の固定化、秩序化を図るものであるが故に発現形態は状況によってちがうが大胆なかつ徹底した左のプロレタリア的革命的暴力が必用となるのである。この認識は我々にとって絶対に必要である。それは党の早急な状況への対応を要請するのであって、この運动の質的、形態的変化に対応できぬものが日和見主義として出現するのだ。しかし依然として意識と形態とのズレは存在するが、その打解の方向はダイナミズムの中に於ける新たな大きなイメージをかゝげての革命权力の体制の確立を目的に行うことであるとしても

それのみではなく、まさにこの時にこそ党の宣伝、組織化が要請されるのである。（最終的ヘゲモニー）。流動を開始した大衆の意識を思想次元で受けとめれない者は党ではありえない。大衆の中での思想的オルグ（レーニン流に云えば『革命权力の説明活動』）がなされるべきなのだ。この二つの結合が始めてズレをうめるのであり、党が革命权力として登場しうる前提である。あとは「大胆なれ！大胆なれ！更に大胆なれ。」ダントン

㊂ 上述のように党の全面的指導が問われるのである。「歴史が急激に転換するとき、先進的諸党でさえがなり長い間新しい情勢に適応できないで、明日は正しかったが今日は何の意味もなくなったスローガンーその歴史の急激な転換が突然やってきたように、やはり突然その意味をなくしてしまったスローガンをくりかえしているという場合がこれまでたびたびすぎる程あった。」以上のことは運動論、組織論、更には当時の結合についても云えるのである。（一九〇五年「労働者と農民の革命的民主ヨミ的独裁」が一九十七年ソヴェトとして現実化された時のレーニンの論理を見よ。）党のスローガン、戦術はこの時期に於いては、大衆斗争組織に於いては、「反革命权力（暴力）を粉砕せよ」であり、政治組織に於いては「革命的暴力を一自己を革命权力として登場させよ」であり、戦術は内乱＝暴力である。前述のズレをうめるべき党（先進部隊）の代行と党の斗争対象への介入による（それは動的に、静的にも行わるべき）大衆斗争組織の非合法的权力化を目指す組織化の時期である。何故なら今までの極限的状況を支えていたものが大衆の包括性と無自覚にあったのであるからこの決定的な段階に於いては全面的な全体的なプロレタリアートの独裁とその下へのヘゲモニーの吸引が志向さるべきである。故に他党派の全面的十字切りとプロレタリア的党秩序が唯一の課題となるのである。

㊄ 自己权力ー革命权力秩序の確立による「自主管理、自主訓座」が定着化さるべき時期。これは㊂の㊇に於けるそれとは相異するものである。前者はいく分戦術効果的、過程ヘゲモニー的なものとしてあったのであり、后者はプロレタリア权力としての体制として到りつしたものであるべきであるが故に量的により高度なものと云える。それが具体的にどういう内容と形態になるかは今の段階では予想できない。

以下は図式化苦難。　自己权力＝ソヴェトの問題。

明大斗争は㊂へ突入する段階で敗北した。そして今后も学園斗争は良かれ悪しかれ程度の差こそあれ敗北をこうむるだろう。であるが故に、党によるその斗争の明確な指導の方向が設定さるべきであり、その革命的戦略が要請される。革命的ヘゲモニー貫徹による斗争の終エンが絶対必須となるのである。それが唯一、現代階級斗争と学園斗争を結びつけるものである。

Ⓐ 大衆斗争組織、党的斗争組織と合法、非合法斗争（斗争組織の質的機能と形態）
合法、非合法を形態的に規定するものは大衆意識であるが故に外的暴力に対する対応によって（流動の契機の全面的利用）大衆斗争組織それ自体を自己权力ーソヴェトへと発展させることが絶対であると同時に合法から非合法への大衆意識の発展止場を弁証法的内在性として発現さすべき大衆意識の現実性に密着した日常的党活動が要請されるのである。それは上述のように日常的党的陣地的知的ヘゲモニーと極限的機動的政治的ヘゲモニーの結合として志向さるべきであり、それは暴力対暴力という修羅場に於いてなさるべきであり、ルブル的観念の場と静態的組織活動に於いてなされるのではない。
この項は依然不明な点が多いので全同盟員は検討して下さい。

Ⓑ ソヴェトと党（統一戦線とヘゲモニー）
この項は現代階級斗争の主要問題です　更なる検討（特にケラムシ）が必要です。

ロシア、ソヴェト型シヨック法とイタリア、レーテ型オサエコミ法との結合＝政治がイナミズム（戦術）とヘゲモニー（党活動）

㋑決戦期に於ける党の代行　㋺斗争者等を通じてのヘゲモニーの貫徹　㋩自主管、自主訓座による知的、道徳的ヘゲモニーである。

戦後世界資本主義の不均等発展が蓄積してきた矛盾の集約として世界IMF体制の危機、ジュネーブ協定の危機、NATOの危機等総じてヤルタ体制崩壊―危機は、レーニンの定式した巨大な資本主義列強による世界の領土的分割という最終段階へ世界帝国主義のMが突入したことを示している。そしてそれは米―ソ対立という戦後世界体制の中に、米―EECの対立、中―ソ対立という新しい要素を登場させつつそのことは戦後唯一完成した帝国主義として登場した米帝国主義によって行われた日本、西欧への経済、軍事援助による国家資本輸出―ドル散布(ドッジ、マーシャルプラン)、商品輸出が資本主義の不均等発展の必然過程であり、EEC―日本の登場、そして中ソ論争にまされた中共の登場、更に後進国解放斗争という要素を新たに登場させてくる。即ち米―ソ対立＝米―ソ協調＝平和共存として戦後維持されてきたヤルタ体制―巨大民族国家間協調―は、米―中対立、米―仏対立、中―ソ対立、ソ―独対立及び米―独協調、仏―ソ、仏―中協調へと多元的な民族国家間への対立と協調へと移行しつつある。これらなならこれらの協調と対立が戦後世界体制そのものを根底から破壊せざるをえない故に現在は一方で民族国家間対立＝協調に依拠しながら他方でこの対立―協調を破壊せざるをえない矛盾のMとして展開されている。とりわけ仏、独、日の登場と再編、強化はそうした中で中立主義イデオロギーを軸とした新たな位置と方向として現われてきている。

ベトナム戦争をめぐる各国民族国家の対応は以上の前提の上に把握されなければならない。ベトナム人民の武装斗争は、このヤルタ体制の中での資本主義的経済関係での民族経済の建設に対する不信であり反抗として斗われている。つまりアメリカ、EEC、日本等の生産力、資本輸出による民族経済の建設に対するものであり政治的独立にもかかわらず全く保障されないが故に社会経済的革命としての性格をもっている。これらなら民族自決のスローガンは、ヤルタ体制からの分離の自由を目指すものと仏、日の中立主義と経済外交による民族国家への介入に対するものという2つの意味をもっている。この仏、日帝の中立主義、経済外交を軸にした後進国勢力圏の確立が金融力頭制→資本輸出を通じての資本主義的結合―米、ソから仏、日への移行―として企図されるが、それはヤルタ体制―米、ソーと日、仏の力関係の上で今だ全面的ではない。しかしこの時点にあって各国労働者人民の斗いは重要である。従って我々は「民族自決によって一切を語りその政治的独立を経済、社会的内容より重要視するのではなく、資本主義的結合で解決するという金融力頭制のスローガンを特殊な階級の特殊な利害という内容まで高めることである。

国際情勢における ヤルタ体制の崩壊に対し、我々はまずそれを世界帝国主義の再編と世界革命の分岐点として把握し、まずに先進資本主義国における国民経済の危機を国家による政策＝資本主義的生産力における対応としてではなく労働者階級のヘゲモニーにおける新たな生産力と生産関係をもって解決し、次にそれによって後進国の社会、経済的危機を解決するものとして語られなければならない。

以上の国際情勢の特徴をヤルタ体制の崩壊＝民族国家の登場と国民経済の危機として把握するならば、50年代―60年代後半における日本階級斗争の変貌とその中での学生Mの位置と方向を明らかにし、そこから昨年の同志社における ベトナム反戦斗争の総括をなさなければならないだろう。

現在における情勢の国内的な特徴は、まずに戦後復活をとげた日本資本主義の資本の強蓄積力程、即ち景気循環、資本循環力程の最終的な終了段階に突入しており、帝国主義としての完成を目指す金融力頭制国家即ち資本輸出への移行とそのための全支配秩序そのものへの完成段階へ移行している。まずには、戦後憲法体制と生産力程の高度成長を軸とした戦後型国民統治原理――国民経済の発展＝国家の発展、個人の発展＝国家の発展という民族国家の発展を自然律の中に解消する原理――そうした国家の幻想性の崩壊である。そして新しい幻想性の発生は、この国民経済が生みだした諸階層の対立、諸矛盾は国家の諸階層から超越した政策、組織、技能、教済によって解消できるという内容をもって登場してきている。即ち、「不況克服から福祉社会建設」そして「平和外交」である。具体的には物価上昇と国民生活に関しては諸々の社会保障政策(医療、保健、住宅政策等々)から減税政策であり、企業の収益性の低下と企業減税に関しては、企業減税から国債発行として

行われ、国際収支と輸出の問題は　日韓なら日中貿易　東南アジア経済協力　アジア開発銀行等として展開されようとしている内容である。そしてそこには　前に述べた国際的なヤルタ体制の崩壊と「民族国家の防衛」「民族国家としての権益を保証」という民族主義、ナショナリズムの登場である。これは日韓問題で既に「経済外交」「平和外交」として表われ、この論理と国家利益を一体化し企業利益と国家利益、個人利益と国家利益を同一視した論理をもって表現している。池田なら佐藤の登場は支配者の論理な設会制民主々義、平和外交をたてにとり逆に自らの論理として活用した段階く日韓>なら国家＝企業利益の問題として市場、貿易の内容として社会排外主義を国民諸階層の意識に訴え集約しはじめているのである。そこには戦後国民統治原理の下で争われた市民的統一戦線の等質性破壊として現われている。これは直接的には日韓条約の締結をめぐって行われた自民党の単独強行採決に対し、安保改定における単独強行採決に対しておこった様なボーナな市民Mないし民主々義Mな全くおこらなかった点に典型的にみることができる。これは戦後型国民統治原理の等質性なそこには高度成長＝設備投資による資本の強蓄積、資本循環　景気循環過程な労働者の賃上げを軸とした経済斗争を集約し上ならの理念としての組合い民主々義に対し生活防衛－賃上げでもって実体化するという総評の春斗方式、一律ベースアップで表現された組合的経済斗争の内容として存在しそこには戦後食管制＝農協中小企業保護政策による農民ハズルとの同盟＝物質的基盤を軸に設会内多数を形成することによって一切の斗争を設会をめぐるルール上の問題＝設会主義、合法主義として市民的政治斗争な展開された。その組合的経済斗争な戦斗化したのは景気循環＝資本循環の終了過程での三池斗争として現われ、伯者の市民的政治斗争は安保斗争の中でハズル急進主義として現われた。いずれも現体制維持ということにおいては同一であり、安保に対応して提起された社会党の反独占民主連合政府や日共の反米民主連合政府は設会制民主々義擁護という点で全く同心上俵の上にあったのである。それは安保全学連の急進的トズル主義も同様である。具体的には安保破キ国民共斗会議、社共統一行動、原水禁Mの崩壊として表われた。安保－三池斗争の敗北は正しく戦後型国民統治原理としての国家の幻想性の破壊力程の進行と新たな国民統治原理の形成の中で圧殺したのである。池田の登場は所得倍増策による民主々義々会上のルールの問題から経済的な内容として国家的、国民的な経済の発展として経済的民主々義の問題を提起し国民利害＝国家利害の内容を国際自由化、市場進出という外交的、対外的な民族利害の一体化させた経済外交＝経済ナショナリズムとして表現したのである。

しかしなから資本のMなもつ論理はその社会性により戦後型国民統治原理を破壊しつつあり　不況から市場進出、資本輸出の進行は、諸階級の独自的な主張と分化　そして対立としてその矛盾の上に戦後階級関係を総括した新たな国民統治としての国家の幻想性を最大限に発揮しうるかという問題に直面している。

独占体形成から金融力頭制→資本輸出への発展は国際的な資本の自由化とヤルタ体制の崩への対応関係としてとらえるならばそこに大蔵省を中心とした金融コンツエルンによる金融支配の強化、そこに産業コンサエルトラストによる産業と銀行の結合と国家独占体を目指す通産省の政策である。そこは流通力程における対応として金融財政々策にその解決を求め国際収支の資本輸出型への移行即ち、貿易収支の黒字－資本収支の赤字、独占価格の形成の方向に解決を求めている。そこは生産力程における産業構造政策を中心とした解決として国際独占体の形成とそこ次産業とそこ三次産業の切りすて即ち独占体の形成→金融力頭制→資本輸出への力程な　公債発行、市場創設を至て計画経済や統制経済へと発展する力程をもちなから国家資本による財政　金融政策として現在な特長づけられるのである。これらの基盤の上に立った新たな支配秩序　国民統治原理な福祉国家論、計画経済として国家の優位、超越をその内容として提起されている。ドイツ革命

以上の国際、国内情セに規定されて我々なヴェトナム反戦斗争を昨年の基軸に据えた最大の意図はベトナム反戦斗争を唯単に反戦平和を目ざす市民的政治斗争を展開することを自己目的化したものではなく　それはベトナム反戦を軸にした世界的な市民主義Mの高揚に依拠しつつ我々な現代の国際的な帝国主義のスー勢と日本帝国主義の動向を鋭角的に分析し現在の階段の分解と対立の進行下での我々学生Mの特殊な任ムと役割を一方

確立しつつ、他方でなく主体の危機なら労働者Mの階級的視点の確立と政治力程への足としての再登場を目し、再度の階級的流動化の社会的K機を作りだすことであったし又他面早大斗争の歴史的教訓を踏まえつつ我々の反帝斗争の歪少化と機械的把握を否定し真の日本革命なら世界革命に向けての我々の民主々又的政治斗争としての自己の限界性を内包しつつもなく限界性を目的意識的に乗りこえるところの真の学生Mに於ける反帝斗争の再初築を形成すべく活動家としての認識法、活動形態に於ける体質改善をその最大の課題として追求したのだと云うことを自覚せねばならない。そしてベトナム反戦斗争に対応した我々の観点は　I、ベトナム反戦斗争な60年以后の池田なら佐トのブルジョア政治委員会を一貫して追求せしめた下部構造の改編と再編化の下での小ブル階級の分解を昨年来の「日益日防論」に集約すべき政治ナショナリズムの提起ならこのヴェトナム反戦斗争で究極的に進行せしめ70年に向けてのブルジョア独裁形成への礎石を型作ることであった。即ち佐トに於ける日益日防論の提起は、民族利害を全面的に掲げた支配者の全日民的統治形態の変センと新たな統治形態の完成を目指すものであった。以上の支配階級の動きに規定されななら既成左翼は第三次防を突破口に体制内的につなぎとめられ、第1に日共の自主独立路線一宮本派の勝利と中共派のしめだし、第2に社会党内部に於いては佐々木派の后退と江田派の胎頭　第3に総評民同の大田一岩井→堀井一岩井ラインの形成　それは若年技術者足の右傾向　IMFJCへの傾斜　他面での合理化　首切りの集中的環の強い公労協　私鉄総連石炭産業での中高年足の部分的左傾向一既成指ド部をのり切ってのアナルコサンジカ化一64年4/17以后の春斗。第4に同じく労働線戦でも下足労働者　未組織労働者はなく上足労働者足の分解につれて50年代の如き民同に集約されることなく一部は日共への「前衛」の幻想を追って集約され左ならの排外主又を形成し残り大部分はブル支配の危機として同時に登場した小ブル宗教政治集団である創価学会に集約され右ならのファシズムの温床を型作っている。

なように現在の階級情セは　労働戦線　既成左翼の一早くの分解と体制内集約と共に小ブル階級の分解を潜在的に押し進めてきた。それは池田時代の高度成長下でも60年以后の消ヒ者物価の上昇を基軸として展開してきたのであった。第1に消ヒ者物価の上昇な労働者階級とりわけ下足末　組織労働者足と消ヒ者との対立、上足組織労働者と下足末組織労働者足との対立を生みだし　第2に消ヒ者米価を軸として農民足と消ヒ者足との対立　更に公共料金を軸として官公庁組織労働者足と消ヒ者との対立を生みだしている。以上の如く小ブル階級の分解と対立は　佐ト内閣下での金融力頭制下では　現代帝国主又＝国家独占資本主又の最大の特長である。「上部構造な下部構造には原則的には規制されつつも　逆に上部構造な下部構造に介入し体制ヨーコの観点なら全面的に諸政策を展開し　更に上部構造独自の活動形態を保持する中なら新たな全階足　全階級に対する統合〈次ページ〉

MEMO ①. 主体.
②. 組織論.

16

形態の純イデオロギー的統制である。なく下部構造での潜在的に諸階層、階級の分解、対立の一定程度の進行とそれに起因する諸階層間、階級間の流動化と意識性の形成を究極的に集約するものが独自性を保持した上部構造の純イデオロギーなのである。それが現代帝国主ギのレーニン時代の帝国主ギに見られない最大の特徴であり、なく上部構造の独自的活動と上部構造の下部構造への政策的介入が資本主ギの蓄積過程下での必然性である恐慌を回避させたりインフレと過小資本メカニズムを形成したり、搾取、大衆収奪の強化下での諸階級、階層の自然発生性の潜在的蓄積が顕在化した場合、逆に右傾化せざ　えなくなったりするのである。なく上部構造の下部構造との永続的な相関性を保持しながらの二面作用は、昨年来の第三次防をその烽火として、本年度のベトナム反戦を通じて全階層、階級に対する最終的とも云える統治形態の形成を潜在的に、完成せしめるものであったし、それは日韓－第三次防－小選挙区制－改憲－安保でのヌル独裁の達成す最大の砂石を形造るものであった。故にベトナム反戦に対する我々の対応は、最初に云った如く全体像の把握く①戦後世界体制と世界資本主ギ　②資本主ギの復興発展力程、③階級構造とヨロレタリアートの動向　④小ヌルの存在と学生Mの位置と立場＞ならそのMの置かれた位置と立場を導く方法論が必要とされていたし、他方自らの体質改善の問題として階層の分解の必然性を現代帝国主ギの資本の論理から認知し、なく動向とスウ勢を否定することなく自己の階層の分解に伴う自己疎外の拡大が唯一階級間対立の問題として提起される限りに於て我々の階層分解化の矛盾の止揚は労働者階級の階級的意識性の形成と自らの自己权力形成並びに階級の止揚と国家の死滅を目指しての政治力程への層としての登場であることを自らの階層の危機、主体の危機から、なくヌル体制の打倒とヨロ独裁への形成に向けての戦略的、戦術的統一戦線を全労働者階級と分解が進行している全階層に対して如何に明らかに提起しうるのかであったし、更に自らの共産主ギ活動家としての総体的弁証法的分析方法と活動形態がいかに自己の内部に、組織の内部に形成されたのかと云うことが先ずもって、今や我々が確認しなければならない。

以上の様に現在の我々の学生Mの特殊な機能と任ムとは、次の3つの要因により構築されねばならない。①平和、民主々ギとしての支配者による全階級、全階層統治形態の崩壊とそれ故に支配者自ら、なくヌルジョア民主々ギの破壊による「国益国防論」を基調とした权力の全面改重をオウカする政治ナショナリズムの新たな統治形態の形成である。②唯一残在していた大学インテリ層の階層の分解が開始され、自らの階層の分解主体の危機から如何に自己を表示し、反体制意識として自らを如何に思想的に構築し直すのか。③50年代の市民的政治斗争の崩壊を民主々ギ斗争としての限界性を有しつつも、なく限界性を如何に打ち破り、新たな階級斗争拾頭への布石を学生Mとして如何に打ち、介在さしていくのか。かかる現在の統治形態を形成する三要因に規制されて、我々学生Mの任ムと役割も根底的に改編せざるをえない。それは層としての学生Mの崩壊と先駆性論の全面的崩壊となく主体の危機より派生する小ヌル急進主ギ、アナーキズム、ジャコバンキギの極左主ギと他方右翼日和見主ギの二極分解への徹底的な批判でなければならない。それは、すぐれて共産主ギ者としての自らの認識法、思考法、行動形態に於ける自己の構築と共に組織としての共産主ギ活動に向けての機能と任ムと分业体制の確立でなければならない。

現代学生Mの自らの市民主ギ性の脆弱は、それ故にすぐれて指ド理念に於ける先駆性、つまり党（前位）と大衆M、組織政治と大衆組織の指ド理念に於ける有機的結合と共に相互の独自活動を徹底的に明白にした分離の必要性が問われている。つまり大衆Mとしての学反会Mは、自らの一方での市民主ギ的政治斗争、他方での経済斗争の相互離反と自己の変革意識の限界性を充分に認知しつつも、なく市民主ギ的政治斗争、経済斗争の2本の様を不断に追求し、なく限界性をMの実態として明確にすべき戦術を徹底的に追求することでなければならない。なく、層としてのMの再現を再度徹底化し、自己のMの限界性を戦術の中でバクロしていくことでなければならない。それは一方での市民主ギ的政治斗争にのみ依処する場合には大衆をダロウした政治主ギであり、赤色自治会主ギであり、他方経済斗争のみに居処する場合には、大衆の自然発生性と即物的要求に立却

した大衆追隨主義である。故に現在の学生Mとはなく2つの柱を如何に極にまで尽としてのMの形成を型作るべく方向性を模索すると共に自らの限界性を如何に明晰なつ大衆的に結集した個々のエネルギーに環流していなければならないなである。唯、なく大衆Mの限界性と2本の柱の相互離反性を機能的に結合させていく活動な政治組織としての党的な活動に見出されねばならない。なように現代の大衆Mと政治組織の活動の分離と結合は独自の活動を徹底化させつつ追求されねばならない。

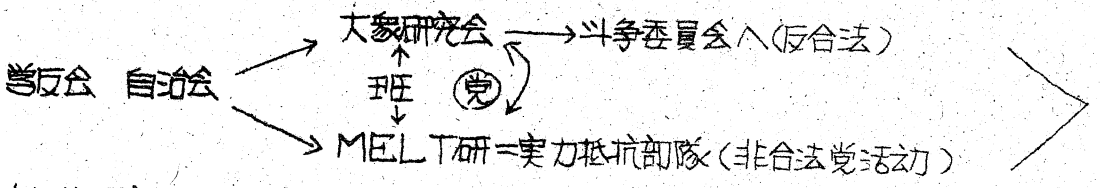
大衆組織——圣済/政治斗争—50年代斗争として徹底化—ヘゲモニーは大衆

政治組織——独自活動の展開 ①研究会 ②組織化 ③反帝政策

更に現代学生Mの高揚の特長として我々な今や明確に認識しなければならないのは 大衆意識の流動化 分断化 自然発生性の問題として疎外された大衆の即物的要求に依拠した個々の自治組織での個別課題を通じての尽としての意識のMへの転化にしなその高揚をみいだされねばならない。

現代独占資本主義段階に於ける圣済斗争と政治斗争の結合性な（同大学館斗争で明らなになった如く圣済斗争の徹底化な直接的に政治斗争→革命意識への発展と云うシェーマは絶対打築されない）逆にこれは圣済主義におちいっていくであろう。大衆組織たる学友会は自然発生性を最大限吸引しつくすMを提起すべきであり、政治組織たる同盟は明確にブルジョア权力に対決する自己权力の形成として自らを登場さすべきである。例えば「授业料値上げ白紙撤回」の段階で その一点で結集する統一戦線の下、その斗争のヘゲモニーは自治会 学友会にあるのではなく大衆にあるのであるな 同盟はこれをいなに目的意識的に指導していくのなである。即ち同盟は思想的、機能的に权力そのものを体現した存在として自らの方向を大衆のあに示さねばならない。より具体的に云えば思想的、機能的に組織された同盟員は 各大衆組織の末端に配置され 自治会方針の煮つめと同時に权力としての政策を準備することであり 学友会Mのダイナミズムの中で政治斗争 圣済斗争の結節 環を自らな体現しなつ自らの表現を大衆組織の一員と政治組織の一員と云う2重に於いてふまえねばならない。

最后に同盟と学友会とな具体的Mの中でいなるルートをとるな



これは先程云った活動家の2重活動であり そして2つな別々に追求され極限に於いて結合する方向をとらねばならず一方なら一方へのルートは必ず破産することを確認し 同盟員は何よりも自らの2つの表現を使いわけるべきでありそれなくして複雑に屈折する現実力程に工作者として介在することはできない。

けいドレツ革命
政党がそのものとして登場 → 敗北

けいロシア
ソヴィエト

京大 政治方針 勝
細織方針（おやのう） 敗

理論主義

〈方針〉

宮保・三池斗争を頂点とする五〇年代阶級斗争からの転換、その質を決定する内容の展開、第三期論―社会政治斗争の提起によって、我々は「国際政治情セが国内政治情セに直接反映し、更に国内の政治斗争・経済斗争が結合して発展する時代に日本資本主ギが突入したし「もはや一個の戦術の鋭角的な展開によって学生大衆をも集約し、合わせて労働Mへの影響を与えるという戦術が、即ち永久革命型の指ド性がMの前面に於て以前にもまゝわらず有効性を喪失している」という状況認識を得、我々の取るべき新たな組織論的M論的対応の解明の出発点とした。日幹―早大―明大諸斗争を経る過程は、日本帝国主ギ权力が矛盾を深めつつもその体制維持のための準備を序々に整え、金融寡頭制支配を社会の末端にまでおしつけ、それをもって全社会的な再編を遂行する過程であることを如実に示した。そのことは何よりも金融力頭制支配による諸阶級・阶層の分断化状況が顕在化する過程であったし、それと同時的に各々の層の個別的特殊利害が、つれを伴いつつも必然的に諸阶級の対立を生じつつ、表出する過程であり、それに対する主体の側も状況の変換に見合って、様々なイデオロギー的偏向におちいっていく過程でもあった。

そのことは、いわば組織論的・M論的にも、新たな段階に対して一般的提起としての性格をもっていた第三期論の内容豊化、具体的対応を付加する段階であった。

そのことをふまえつつ、我々が「第三期論」以降獲得し、現在に至っている諸問題の提起をすると共に、今后の我々の方向を考察してみよう。

現在の国内体制は、高度成長を経る過程で、資本の集中・集積から独占体の形成、として独占体と金融資本の形成＝金融力頭体制の段階として位置付けられ、現在の基本的な諸矛盾は、この支配体制によって形成されている。この「金融力頭制」国家は、議会代議制国家のセイ弱性の克服、つまり経済生活、国民諸阶級の全社会的生活への国家機能―行政权の貫徹として登場しつゝある。即ち金融力頭制が必然的にもたらす小ヌル・ルンプロの切り捨て、プロレタリアの体制内化への吸引という、いわば五〇年代の「国民経済の発展―生活利害の貫徹」といった形で集約できうる状況から一変して全社会が流動、再編され、それに対する対応をなさなければならなくなった現在、それは必然的に人民と国家の対立を招来するからである。金融力頭体制のメカニズムは、各々の阶級を分断し、自らの下に集約し、支配を貫徹していく。それは同時的に「民族」「国家」の利害を値にとった形で行なわれ、市民社会の動揺と分断を更に押し進めていく。日和見主ギ、改良主ギとして、それと帝国主ギとの結合＝社会排外主ギ等の体制への屈服を招来し、自らの利害の確保の方向も様々である。しかし全体的な力頭金融資本の搾取によって諸阶級は分断された状況下でも、国家に特殊利害を独自に要求、即ち五〇年代の代議制民主々ギとしてではなく、直接民主々ギを表現して、国家と個別的対抗関係を結ぶ様になる。この様な状況は、当然にも家をめぐる諸阶級の再編をもたらし、同時に大衆の自然発生性＝独自利害を追求する斗争を開展するようになる。そのことは、〈日本と人民の全面的対立を引きおこし、全面的な反政府斗争の発展する萌芽を内包している〉。しかし、各阶級の政治過程への登場が各々の特殊利害をいっさげてのものであるが故に、被支配阶級内部の利害の対立によって、いわば等質的な問題も、その意識をくもらさざるをえない。この時点における我々の対応は、一方に於て、「市民社会」の動揺と分解と、そこから形成される大衆の自然発生性・個別合法改良斗争を〈意識と斗争戦術の相互的発展を媒介として〉、より高度な領域、帝国主ギ国家との全面対決、自己权力的斗争戦術が必要とされる段階へ導き、大衆に経験をつませると同時に、プロレタリアヘゲモニーの貫徹できる実力斗争武隊を形成すること。他方に於て、帝国主ギのもたらす政治社会の動揺と分解から起る大衆の自然発生性を大衆の現実的利害を金融力頭制国家に反対する全人民の共通利害として体系化し、プロレタリアートを中心とする全人民の同盟を図らなければならない。即ち、対国家要求＝直接民主々ギ斗争の中に、現在的な国民諸阶級の政治的・経済的諸要求を統一的に表現するところの最小限綱領を提起し、全人民的統一戦線を創出していかなければならない。

更に帝国主ギが必然的にもたらす「戦争の危機」「他民族抑圧」「強权的反動」は小ブル民主々ギ的「反帝国主ギ」派の増大を通して、人民内部で対立しつつも金融力頭制の専制に対する統一した政治斗争を展開できうる基地の一面を表現している。

具体的に云うなら、社会党左派、共产党の代議制民主々ギに直接民主々ギを対置し、社会党右派、民社党、公明党の社会排外主ギ小ブル、小ブル的上層プロレタリアートの特殊利害要求に対する全人民的要求、国际主ギが提起されなくてはならない。この最小限綱領に基づく全人民的な政治斗争と統一戦線こそ、現在的に「金融力頭制国家」の分断支配に対して、プロレタリアートの側へ国民諸階級を結集する政策である。現在的な学生運動の先駆性は、この全人民的政治斗争－全人民的統一戦線の主導部隊として位置付けられなければならない。原潜－日韓－ヴェトナム斗争を通じて意識的に展開された国际主义に基づく政治路線を、全学連の全国政治斗争を通じて物質化すると共に、反战青年委員会から社共共斗に対する統一戦線の結成を要求する組織路線へと発展させなくてはならない。だが、これだけでは決定的に不十分である。ブルジョアジーは、国家行政村村を通じた即自的利害での同盟＝金融寡頭制を軸とする諸階級の配列関係を整え、イデオロギー的に社会排外主义、ファシズムをナショナリズムとして収斂するという、いわば大衆の自然発生性をブルジョア政党による＝上からの組織を通じて貫徹される。従って、個別斗争、全人民的政治斗争の中で形成されるプロレタリアートを軸とする諸階級の結合関係をプロレタリア国家として、そして、その現在的表現としての「綱領」として提起することが環である。

これを別の側面からみれば、『政治斗争、社会政治斗争の統一した実態的表現形態として、即ち、大衆の核としての分散性と部分性に対して、一切の諸斗争をプロレタリアート全体の階級的行動へと発展させ、大衆の要求を社会的、政治的解放に向けて導き、現実の政治－社会权力の対極にプロレタリアートの自己权力－プロレタリア民主々ギの潜在的表現、機能としての意識性、組織性を与えるものとして「労働者政治組織」（第三期論）の整備の重要性が確認されるわけである。つまり市民社会、政治社会の動揺、分解から大衆の自然発生性を組織し、組合斗争（自治会運動）のみでは、究極的なプロレタリアへのヘゲモニーの移行はなされない故に、权力斗争、即ち市民主ギ国家体制とその支配構造そのものに対する革命党独自の斗争、換言すれば目的意識的な政治斗争が必要とされるのである。帝国主ギ国家の行政機能への大衆組織＝上からの大衆統合に対決する权力斗争の形態は、政党機能への、政党活動への大衆の全面的組織である。組合斗争＝個別的改良斗争と全人民的政治斗争＝総括的改良斗争の両分野に於ける斗争とは、独自、党による目的意識的政治斗争＝权力斗争を組織すること、大衆的な党組織それ自体の中に行政权を包括する政党組織をつくることが緊急の課題である。今日帝国主ギ国家の支配様式が「大衆組織」の「反权力性＝政治性の喪失」国家機能への組織化にあり、その条件が大衆組織の運動の行政機能による抑圧にあるならば、この权力斗争の第一の性格は、大衆組織の反权力性、政治性の防衛＝自治权担証斗争、第二の性格は、行政权の執行、機能それ自体への対決の斗争である。即ちこの分野に於ける諸問題は「裁判」「政治スト」「学内K察侵入」「公安条例」「自治体選挙」等々の問題がある。

以上.